

近代気象学の開拓者荒川秀俊博士略伝

1. 荒川秀俊と正野重方

1930年代の中央気象台には2人の若き俊秀が妍を競っていた。彼らは何をしたか。それは2人とも気象学の近代化を図ったのである。それまでの気象学は現象を観測し、統計をとり、記録しておくという記述的な学問であったが、彼等はこの大気熱力学や大気力学を導入し、気象学を物理学的に、より厳密な学問にすることを図ったのである。そしてそれは成功し、今日の気象学の発展の基になったのである。その意味でこの2人は近代気象学の開拓者と言えるだろう。

2. 2人のちがいがい

荒川は1907年福島県生れ、1931年東京帝国大学理学部物理学科卒業、直ちに中央気象台に入った。正野は1911年大阪府に生れ、1934年荒川と同じく大学を卒業、大学に残り、翌年気象技術官養成所（現気象大学校）講師として中央気象台入りした。荒川は定年まで気象庁に留ったが、正野は1944年母校の助教授となり気象台と兼務であったが、戦後間もなく専任教授となり気象台を去った。戦前のことであるが、2人には学問上のちがいがあると言われた。荒川は大気波動を論じたが、正野は大気渦度説を論じたという。後の事であるが、正野の直弟子であった現在の京都大学廣田教授の著作に「渦と波を表わす模式図」というのがある。現在の高層天気図に見られる大気の流れは波となって流れてゆく。しかしそれは平行流と渦（正の渦と負の渦）の和であるというものである。廣田氏によると正野先生が講義中に黒板にさりげなく画いたもので、これは面白いと思って後に清書したと言う。前記2人の論じた頃はまだ高層気象観測というものは試験的段階の頃であった。今にして思えば、2人は同じことを言っていたのではないかと思う。大学へ行った正野の下には多くの秀才が集い、内外の気象界に多くの人材を生んだ。一方、荒川は気象庁という組織に残ったので部下はいたが弟子という程のことはなかったようである。



在りし日の荒川秀俊先生。右の女性は常岡好枝さん、後列は左から荒川昭夫氏、松本誠一氏、増田義信氏。（松本誠一氏提供）

3. 荒川秀俊の生い立ちとプロフィール

荒川秀俊は1907年8月4日、福島県白河市に生まれた。県立安積（あさか）中学校から仙台の第二高等学校を経て大学に進んでいる。父の職業は獣医であった。馬が専門であったようである。荒川家は元々の白河の人ではなかった。先祖は下野国壬生（みぶ）藩藩士で役は馬廻り役であった。廃藩置県により全国の武士は一斉に失業した。白河には陸軍軍馬補充部が置かれたので、特技を生かすべく白河に移住したのである。元藩士の家とて四書五経の類があったが、荒川は小学生にしてこれを読んだという。神童荒川も中学へ行くには、当時白河には中学がなかったので、県中央部の郡山まで汽車通学をしたのである。これは本人にとっても家族にとっても大変だったようで、後に新聞の「母校を語る」という手記に冬など暗いうちに起きて食事の仕度をしてくれた母への感謝の言葉を残している。仙台の二高時代は荒川にとっては楽しい青春時代であったらしい。このことはご長男のお話からもうかがえる。荒川と同期であったというO氏（故人）は「荒川君は特に勉強家という程ではなかったが、数学だけはよくやったね」ということであった。

4. 荒川秀俊のプロファイル

荒川は若い頃はスリムでスタイルがよく姿勢がよかった。その頃ダンスが得意であったという。人に接するに絶えず笑顔で親しみのもてる方であった。特にいろいろな意味での弱者に対するいたわりの心が多分にあったようだ。後年の著書「お天気日本史」の中に“2年間の九州生活”という項目があるが、荒川の優しさがよく出ていていると思われる。

終戦直後、占領軍の政策により戦争責任者は公職から追放されたが、戦争中の中央気象台長藤原咲平氏はそれに該当するとされた。即刻官舎を立ち退けということであったが、藤原は自宅を持っていなかった。荒川は世田谷区梅ヶ谷に住んでいた家を藤原一家に提供し、自分達は同区代田にある夫人の両親の家に同居した。荒川は恩師の窮状を見るに忍びなかったのである。

5. 荒川秀俊の業績と著作

当時、40才以前に学位を得るとするのは余程の秀才とされていたが、荒川は30才代でこれをなしとげた。1935年、荒川は日本の気団を論じた。今日使用されているシベリヤ気団などの分類と各称は荒川によるものである。また38年には断熱図による高度決定法や不安定エネルギーを論じている。日本ではじめて断熱図をつくったのは荒川であるという。

40年に「気象力学」を、41年に「気象熱力学」を刊行すると共に同じ41年に「日本気象学史」を刊行している。本書の内容は永年勤続の職員が書いたような緻密な内容であった。時に荒川は30歳半ばであり、最もエネルギーの充実した時代であったようである。戦時中のことは省略する。戦後、「気象学発達史」「気候変動論」を出した。論文としては、1935年に帝国海軍の艦隊が台風突入するという事故があり、当時の観測資料を須田建氏と共に解折して米誌に発表している。この論文は後にルイジアナ州立大学が刊行した「大西洋のハリケーン」に10頁にわたって引用されている。

また英国王立気象学会誌に2編の気候変動の論文を出している。

その後の荒川はもっぱら歴史ものを書いている。「近世気象災害志」他四編が気象研究所から刊行された。一般向けとして、「異国漂流物語」「飢饉」「台風 猛威への挑戦」がある。最後は前出の「お天気日本史」である。いずれも内容は充実している。

6. その後の荒川秀俊

荒川は気象研究所長を最後に気象庁を定年退職し、東海大学理学部教授として10年間物理学を講じた。その後、教養学部に移って気象学を5年間講義し、後事を気象庁出身者に託した。荒川秀俊最後の仕事は先祖の地、栃木県壬生町の町史編さんであった。荒川は東海大学教授として委員となり、これを成しとげた。

荒川秀俊はその後間もなく心不全で亡くなった。1984年の年末で77歳であった。生前に勲二等瑞宝章が贈られ、それを祝って時の福島県知事松平氏から大きな花瓶が贈られていた。

7. 荒川秀俊は後半なぜ歴史家になったのか

ご長男（東北大学歯学部教授）の話によると、荒川はこう言っていたという。

「物理学とか数学をやると20歳代で頭が固くなって以後もう使いものにならない」

これによると荒川秀俊という学者は大気熱力学とか大気力学とか普通の学者が一生かかってやる分を30歳代前半ぐらいで済ませてしまい、あとは気象災害史をはじめ歴史的なものに移行してゆき、歴史学者としても専門家になったのは、一生に2人分の仕事をした人だったのであろう。稀にみる天才であった。

気象学ある限り荒川秀俊の名が消ゆることのなからんことを祈る。

エマグラムと安定、不安定そして気団名は永久に残るであろう。 (島田守家)